

説教「あなたの神はわたしの神」

ルツ記 1 : 1~19

1997.12.7 アドヴェント第2主日
日本バプテスト同盟 関東学院教会

アドヴェント第2週を迎え、今朝も皆さんとともに教会に集まり主を賛美し、御言葉を聞く幸いを神に感謝します。ご出席の皆さんとご家族の上に、主の豊かな恵みと喜びがありますように、主イエス様のみ名により祝福します。

今朝はルツ記1章を取り上げました。それは、ルツがナオミに向かって告白した言葉、「あなたの神はわたしの神です」という信仰告白に注目しまして、お話させていただきます。

これを取り上げたのは、特に、来るクリスマス礼拝には、数名の方が信仰告白をするべく、聖書を学んでおられるという、嬉しい事実を知っているからです。青森大学に学ぶH兄からも告白文が送られてきました。

ルツという人は、ナオミという婦人の息子の奥さんでした。先程読んでいただきましたように、ナオミはユダの国、ベツレヘムの人でしたが、飢饉に見舞われ、ご主人のエリメレクと二人の息子と共に、隣のモアブという国に避難し、そこに暫く移住して暮らしていたのです。

ところがナオミのご主人は、間もなく亡くなりました。そこで二人の息子は、モアブの娘と結婚いたしました。ルツという人は、この息子の一人と結婚したモアブの人だったのです。ところが10年たったころ、不幸は続くもので、この二人の息子たちもまた死んでしまったのです。不幸な女たちが3人残されたのです。そういうところからルツ記1章は始まっております。

今朝はルツというお嫁さんの信仰を中心にお話するのが目的ではありますが、しかしルツの信仰を語ろうとすると、姑のナオミの信仰に触れないでは語れないのであります。

ナオミさんは、モアブの国に移住してからご主人を亡くし、息子を次々と失うという、相次ぐ不幸に打ちのめされます。すべてを失うという天涯孤独の身となりました。モアブに知り合いはありませんから、あとは自分の故郷のベツレヘムに帰るほかないと考えました。また、神はベツレヘムを顧みて、飢饉は去り、収穫があるようになったという知らせを受けたので、ナオミは二人の嫁さんと共に、モアブを去ってベツレヘムに向かいました。

その途中ナオミは、二人の義理の娘たちを、ベツレヘムに連れて帰ることは良くないと思い、二人のために考えました。次のように言います。8 節、「自分の里に帰りなさい。あなたたちは死んだ息子にもわたしにもよく尽くしてくれました。どうか主がそれに報い、あなたたちに慈しみを垂れてくださいますように。」つまり死んだわたしの息子たちにも、このわたしにも良く仕えてくれましたと礼を申します。そして主がその業に報いてくださるよう。モアブの実家にそれぞれ戻って、再婚の相手が与えられて幸せになりますように。そう言ってお別れの口づけをしたのであります。

二人の嫁たちは声を上げて泣いた。女三人、それぞれに不幸を負いながらも、人間として、女性として誠に人間性豊かであり、愛情が溢れる物語であります。しかし姑の薦めにも拘らず、二人は声をそろえて、わたしたちはあなたと一緒にあなたの国に行きます、と答えるのです。ナオミは不幸と悲しみの中に沈んでいましたが、この愛すべき二人の娘たちを、外国であるユダのベツレヘムに連れて行くことは、彼女たちを不幸にこそすれ、幸せにする可能性は全くないことを告げるのです。

この時のナオミの判断によると、この嫁たちがベツレヘムに帰ったとき、結婚の可能性があるとしたら、自分に子供が出来て、その男の子が大きくなれば、その子供と結婚することが可能です。これはレビラート婚、義兄弟結婚といいまして、子供を残さないで死んだ場合、その人に兄弟がいれば、その未亡人となった妻つまり兄嫁と結婚して、子供を残してやるという制度があったのです。

しかし、ナオミは力をこめて、仮に今わたしが誰かと結婚できて、男の子を産んだとしても、その子が大きくなるまで、あなたたちを待たせておくのですか、それはできないことです。それにわたしはもう年ですから、子供を産むことはないのです。13 節の終りの部分に、「あなたたちよりもわたしの方がはるかに辛いのです」と述べている。

この訳は次のようにも訳せます。あなたたちの事でわたしは心を痛めているのです。つまり、自分も大きな痛手を受けて辛いのですが、あなた方が若くて不幸になったので、その事がわたしの心を痛めているのです。このように理解するほうが正しい読みと思います。

つまり三人とも不幸を身に負っているのですが、ナオミは自分の不幸もさることながら、この二人の嫁の不幸を思いやり、何とか幸福になる道を見付けてあげたいという、姑の優しい心配りがにじみ出ているのです。

また、これを聞いた二人の娘は、声をあげて泣きました。そして熱心な姑の説得に従って、14 節によると、一人の嫁のオルパは、ナオミさんに別れの口づけをして、モアブの国、自分の実家へと戻って行くのでした。

ところがルツは、ナオミにしがみついて、離れようとしなかったとあります。これだけナオミが説得してもなお、この姑について行きたいと思わせた、ナオミの信仰と信仰生活の行為はどんなもので

あったか。想像できるように思われます。ナオミさんに出会わなければ、ルツさんはイスラエルの神も、イスラエルの神を信じることもなかったはずです。人生において、一人の信仰を持っている人と出会うと言うことは、そんなにも大切な事であります。

ナオミさんの信仰ってどんな信仰でしょうか。彼女は自分が信じ伝えられた信仰生活の中で、とても耐えられないような試練に出会いました。しかしその中で、ナオミはその不幸な事実を、まともに受け止めているということです。その不幸から逃げ出そうと、もがいたりしなかったということです。

13 節、主のみ手がわたしに下された。つまり夫を亡くし、二人の息子までも失うという目に遭ったとき、その理由が分かりませんが、神がそんな不幸な事をわたしに遭わせた。それは主がなさったことであると受け止める事は、とても辛く悲しいことです。しかしそれは、主がわたしに対してなさった事であると告白しているのです。

これは確かな神への信仰を示すものです。わたしたちはつい、自分中心の神信仰に陥っています。自分が幸せになるか不幸になるか、ということ基準にして神を信仰していないでしょうか。そして自分が不幸になると、そこから逃げて別なところに救いを求めようとするのです。

あるいはヨブ記の冒頭でサタンが言うように、人間は神から恵みを受けて幸福に暮らしている間は、神を敬うかも知れないが、それが取り去られてしまうと、神の悪口を言って去ってしまう。ナオミの信仰は、そういう自己中心の考え方に左右されるような信仰ではなかったのです。

その信仰は辛いけれど、神様がその後どのように道を開いてくださるか、それを神に委ね神に期待するのです。次にナオミの信仰のもう一つの面は、自分と同じように主人を亡くした嫁たちのことを考えて、何よりも心配していたということです。

ルツさんはナオミさんの神信仰を見て生活し、これまで一緒に暮らす中で示された、ナオミとの真実と愛の交わりの中で、ルツはこのナオミさんのような信仰を持って生きていきたい、という願いが生まれてきたのであります。ですからルツにとって、ナオミさんから離れては自分の信仰はないと確信するに至ったのです。

さて、第1章のクライマックスは15～16節に見事に描かれております。オルパがナオミと別れのキスをして国に帰っていったので、ナオミはルツに言いました。あのようオルパは帰って行ったでしょう。さああなたも彼女の後を追って行きなさい、と。それでもルツの心は変わらなかったのです。そしてルツは言いました。16節の初めのところ「あなたを見捨てて・・・」。つまり、あなたを置き去りにして帰れ、帰れと急立てないでください。

わたしは今後絶対あなたから離れていくことはありません。いつもあなたと御一緒に行きますという決意を表明するのです。

ルツのこの決意には、確かに人間的な面があると思います。つまり、老いた身寄りのない姑を独りで国に帰らせることは、嫁として忍び難い。面倒を見て助けてあげなくてはならない。そういった気持ちが働いていたと思います。

しかしそれ以上に、ルツはナオミさんの信仰の生き方、愛のこもった日ごろの交わりの中で与えられた、満たされた生活を思うと、このナオミさんから離れて暮らしたくない、いや、離れるべきではないという思いであったのです。

それは次の言葉に示されています。あなたの民はわたしの民。民とはイスラエルの民族であり、ルツはモアブ民族の出身ですが、しかし今からは、はっきりとイスラエルの民族の一員となりますと宣言したのです。

教会の信仰も同じです。イエス・キリストを救い主と信じるということは、同時にこのイエス・キリストを信じている教会という信者の集団の一員、神の民の一員となることなのです。自分ひとりで信じていればよいのではないかと考えている人もいるかもしれませんが、それは信仰を正しく理解していないのです。信じることは、信じる者たちの中であって生きていくことなのです。

次にルツは言います。あなたの神はわたしの神です。ルツは結婚するまでは、モアブの国の神を神としていました。今、それを捨ててナオミさんの信じている神を信じます。そしてこの神をわたしの真の神として生涯歩んでいきます、と告白したのです。

ルツの信仰は、わたしたち異教的な環境の中に生きている者たちと同じ立場にあるのです。わたしたちもこの日本に生まれ、大部分の方はキリスト教ではない仏教的な家庭の中で育って来ました。信仰はこれまで自分がつながってきたものを断ち切る、捨てるという面を伴うのです。

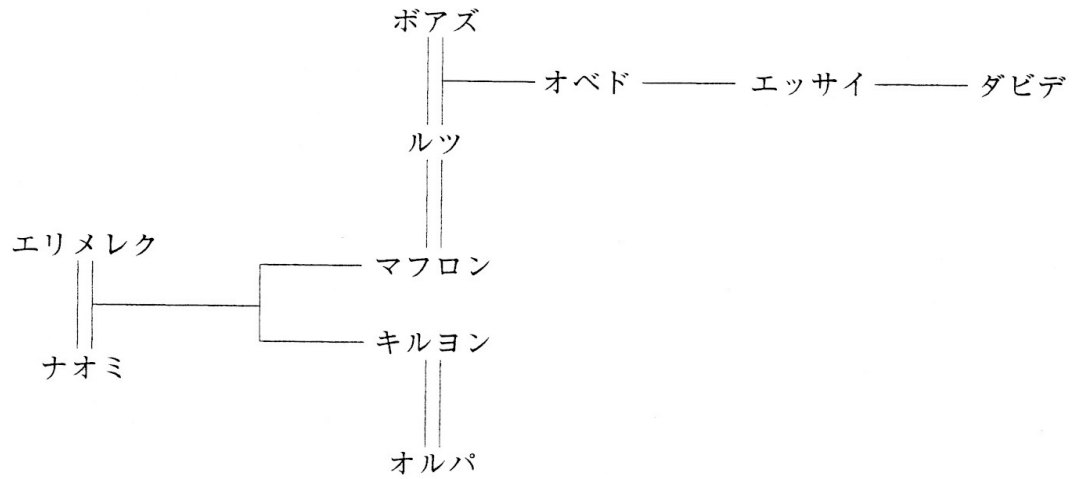
ルツ記 2 章 11 節、ボアズがルツの身の上話を聞いたとき、ルツに向かって次のように言っております。「主人が亡くなった後も、姑に尽くしたこと、両親と生まれ故郷を捨てて、全く見も知らぬ国に来た」と、ルツを賞賛しておるとおりです。イスラエルの先祖アブラハムも同様でありました。創世記 12 章で、主はアブラハムに言いました。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい」と。

あなたの神はわたしの神ですという信仰告白は、過去の間人間関係を離れ、新しい関係、神の民である教会につながることで、それはイエス・キリストを救い主と仰いで、キリストを頭とする教会の一員として生きていくことです。

信仰告白を準備しておられる兄弟姉妹の上に神の祝福と導きがありますよう切に祈ります。

[参考]

ダビデの系図 4: 18~22



レビラート婚 (英) Levirate marriage

イスラエルの特殊な結婚の規定。ラテン語の (levir 夫の兄弟) に由来する。男子が子供を残さず死んだ時、彼の父か兄弟が死者の名と嗣業を存続させるために、その寡婦と結婚することをいう。この結婚によって最初に生まれた男子は、死んだ夫の相続人に定められた。旧約聖書では、タマル (創 38:8)、ボアズ (ルツ 4章) の例があり、申命記では律法に定められている (申 25:5~10 参照)。